
Old Navy Never Die **戦艦「長門」の戦後史**

のり

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Old Navy Never Die 戦艦「長門」の戦後史

【Nコード】

N7493X

【作者名】 のり

【あらすじ】

太平洋戦争終戦時、日本帝国海軍に残されたただ一隻の戦艦「長門」。本来ならば核実験艦として南溟に消えるはずだった彼女は、数奇な運命により戦後日本を生きていくことになる。捕鯨母船「長門」、海上自衛隊護衛艦「ながと」として生きていく彼女と、海の軍人として「ながと」と共に戦い続けたある男の生涯。

(本作は著者が通う大学のコンクールに応募した作品です)

1 (前書き)

本作は、著者である私が通う大学で毎年行われている文芸コンクールの応募した作品を、関係者に許可を得て掲載しております。

「敵機左直上！ 突っ込んで来ます！」

見張り員からの報告が昼戦艦橋に飛び込む。今日一日だけで何十回聞いたか分からないその声は、ほとんど絶叫に近かった。

「取り舵一杯！」

艦長兄部勇次少将の張りの張りのある命令が間髪入れず飛ぶ。敵急降下爆撃機からの攻撃を回避する常道。敵機の方へ舵を切り下に潜る針路を取る命令だ。操艦にかけては日本帝国海軍随一の腕前を持つ兄部少将にとってはいはに等しい戦術行動である。

予め取り舵に当て舵を当てておいたお陰で、普通なら一杯に舵を切っても三〇秒以上は旋回しないこの戦艦「長門」でも、するすると艦首を左に振り始めた。

やがて降下してきた敵機、アメリカ海軍急降下爆撃機SB2Cヘルダイバーの一群が、鯨みたいな奇異なスタイルを見せ付けるかのごとく長門に食らいつき、腹に抱いてきた一〇〇〇ポンド（四五四キロ）爆弾を次々に投下していく。

基準排水量三万九二〇トン、全長二二四、九四メートルもの巨体を誇る「長門」の後方の海面に次々と爆弾が吸い込まれ、高々と水柱を吹き上げる。離脱していくヘルダイバーに向けて、右舷の高角砲、機銃が撃ちまくるが、しかしこちらも全く当たらない。

大したもんだと、艦橋で仁王立ちになりながら的確な回避運動を行い続ける兄部少将を見て、佐竹長一主計一等兵は思った。今の時刻は一三四五時（一三時四五分）、今日の空襲が始まった一〇二六

時から数えて、三度の空襲をすべて無傷で切り抜けている「長門」。操艦が上手い艦長だという噂は聞いたことがあったが、帝国海軍の最下層に位置する兵の立場ながら、内心惚れ惚れする気分だった。

「ただいまの爆撃、全弾すべて回避」

後方の見張り員から報告が上がってきた。佐竹は未だ童顔という括りが抜け切らない顔を引き締め、報告を戦闘記録のノートに記入する。彼の任務は、戦闘中の記録を取っておくことだった。主計という役職は、港に入っている時は仕事だらけであるが、戦闘時はすることがない。彼ら主計の任にある者たちは、戦っている最中はこうして記録係りを命ぜられることが慣習となっていた。

「大尉。現在までのところ、本艦が回避した爆弾三五発、魚雷二九本、撃墜した敵機三機であります」

佐竹はノートに記入していた記録を読み上げた。傍にいた中曽根主計大尉が「うん」と頷くと、空襲が落ち着いて一段落ついている様子の兄部少将の元へ歩み寄っていった。

兄部少将は中曽根大尉の報告を受けると、

「よおし、中曽根君、ご苦労さん」

と笑みを疲労の濃い顔に浮かべて言い、中曽根を下がらせた。戻ってきた中曽根は佐竹に言った。

「大丈夫だよ」

「何がでしょうか」

「艦長がああして無理にでも笑っていられるうちは、まだまだ『長門』は大丈夫だよ」

鼻が高く、妙に構えた表情をしている中曽根が少し格好を崩して言ったのを見て、佐竹は上に立つ人間とはみんな大変なんだなと思つた。この大尉は海軍兵学校出の純粹培養された士官ではなく、短期現役士官といつて、大学や専門学校を卒業して海軍に入隊し、二年間だけ現役で士官を務め主に後方任務を担当するべく集められた「娑婆つ気を残す」士官のために、佐竹のような下っ端の兵隊ともまともな口の聴き方をする。

「『武蔵』の方はだいぶ手荒くやられてとるようだが……」

中曽根が顔を艦橋右側後方の防弾ガラスの外へ向けた。佐竹もそちらへ視線を向ける。

窓の外には、本来ならばそこにいるはずの巨艦の姿がなく、かなり後方にずれた位置に、よるめくように進む「武蔵」が小さく見えた。この「長門」を遥かに上回る超戦艦として建造された大和型戦艦二番艦「武蔵」 基準排水量六万五〇〇〇トンもの艦体に、四六センチ砲を九門搭載する、紛れも無く世界最強の彼女が、敵機に蹂躪され、確実に戦闘能力を喪失しつつあった。

この日 太平洋戦争開戦三年目まで二ヶ月を切つた一九四四年（昭和一九年）一〇月二四日、日本帝国海軍聯合艦隊はフィリピン・レイテ島に上陸を開始したアメリカ軍を撃滅するため、残存する艦船のほとんどすべてを投入する捷一号作戦を発動、シブヤン海を突破しようとしていた。

「長門」は本作戦の主力を成す第一遊撃部隊（指揮官栗田中将の名をとり栗田艦隊と呼ばれる）の第一部隊に属し、「武蔵」やその姉である「大和」と共に、レイテ島に襲来した米軍をその巨砲群で殲滅することだけを胸に、味方航空機の援護がない海域を突き進んでいた。アメリカ海軍の空襲はもっぱら「大和」「武蔵」そして「長門」に集中したが、「大和」艦長森下信衛大佐や「長門」の兄部少

将は操艦が抜群に上手く、今のところ被害を局限に抑えている。しかし「武蔵」艦長猪口敏平少将は諸外国から「キャノン・イノクチ」と名を知られているほどの砲術の大家ではあるが、操艦の方は並みであった。そして上空から見て「武蔵」の巨体は嫌が心にも目立つ。この時すでに「武蔵」は爆弾一一発、魚雷九本を食らい一六ノット（時速約三〇キロメートル）にまで速力が低下していた。

「大丈夫でしょうか、『武蔵』は……」

佐竹は不安そうな声で言った。まだ一七歳の若造に過ぎない彼にとり、あんな巨艦があそこまで痛めつけられる戦闘というものに、言い知れぬ恐れを感じていた。

「時間からして、あともう二回は空襲があるだろう。それさえ乗り切れば――」

中曾根が言い終わらぬうちに「対空戦闘！」の号令がかかった。途端に艦橋の空気が一変する。兄部少将は刻々と入る見張りの報告を受け、その都度指示を下していく。

数分もしないうちに、本日四度目の敵機の爆音が耳に入ってきた。「面舵！」という兄部艦長の号令、「敵機降爆六機、右三〇度高度四〇！」との報告、やがて右に旋回を始める「長門」。「突っ込んで来ます！」見張り員の声に被せるように「面舵一杯！」と大音声で下令する兄部少将。

佐竹はその時、兄部少将が、

「いかん、当たる」

と呟いたのを聞いた。

直後、今まで感じたことのない衝撃が下から突きあがって来た。

「お爺ちゃん、お爺ちゃん」

孫娘の呼ぶ声と、身体を揺する振動で佐竹は目が覚めた。

「うん、なんだい」

「もう着くつてお父さんが」

「そうか、ありがとう」

佐竹はそう言つて早苗の頭を撫でた。早苗は、自分はもう小学六年生になるんだからいい加減小さい頃みたく扱わないで欲しい、という気恥ずかしさの混じつた抗議の視線を祖父に向ける。

いつの間にか寝ていたらしい。歳をとると電車の揺れ心地がたまらなく気持ちよくなる。軽く頭を振り眠気を散らす。

久しぶりに昔の夢を見た。もう六七年も前の、まだこの国に、軍隊というものがあつた頃の夢だ。

「次は、横須賀中央駅、横須賀中央駅です。お出口は左側です」

アナウンス通りに電車は横須賀中央駅に停車し、佐竹と、息子の武一と孫娘の早苗の三人は駅に降り立った。

改札を抜けた中央駅前の大交差点は、土曜日であるのに閑散としていた。無理も無い話だった。前日 二〇一一年三月一日に東北地方の太平洋沖でマグニチュード八・八（翌日九・〇へ上方修正）の巨大地震が発生し、岩手、宮城、福島沿岸部は大津波により壊滅的な被害を受けていた。ここ神奈川県横須賀市も震度五強の揺れを観測している。死者・行方不明者は、かつて阪神淡路大震災がそうであつたように、時間が経つにつれて加速度的にその数字を

激増させている。一万のオーダーを超えるのではないかという声さえ聞かれ始めていた。

日本中が、この近代史上四番目の規模の超大規模地震の情報を得ようと、外出を控え、テレビやインターネットに齧りついている。出歩く人々の数が異様に少ないのはそのためであった。

佐竹は三月一日の地震発生時、横須賀郊外の自宅に家族と共にいた。妻を五年前に亡くして以来、彼は長男夫婦と孫たちと暮らしており、元々、この土日を利用して、博物館や美術館に行つて簡単なレポートを書くという早苗の春休みの宿題を手伝うために、佐竹は早苗と出かける約束をしていた。

地震発生後、佐竹は息子の武一や義理の娘であり武一の妻である幸恵の、またどこで地震と津波が起こるか分からないという至極当然な反対を押し切つて、横須賀市街地へ出かけることにした。とうの早苗はというと、地震は怖かったがお爺ちゃんと一緒になら大丈夫だから、と特に嫌がる素振りは見せず、結局のところ武一も折れ、自分も念のためついていくと同行してきた。家には大学生になる早苗の兄正雄がいるので大丈夫だろう。

佐竹は、あの地震が起きた時から、もう八四を数える身体を引き摺つてでも、「そこ」へいかねばならぬという気持ちに支配されていた。長い間見た記憶のないシブヤン海海戦の夢を見たのも、その非論理的な感情が原因なのだ佐竹は考えた。

思えばあの戦いが、自分と戦艦「長門」の数奇な、そして半世紀以上に及ぶ長い関わりの始まりだった。

横須賀市街地を息子と孫娘と共に歩く佐竹の脳裏に、溢れるようにして、自分と、彼女の記憶が蘇ってきた。

一九四五年（昭和二〇年）三月九日の夜は風が強く、早く春が来てくれないかと思わせるような寒さだった。

前年の一月に主計上等兵に昇進していた佐竹は、昼戦艦橋の奥まったところで待機していた。航海時計は二三五五時（二三時五五分）を指していた。普段ならとうにハンモックに丸まっている時間であるが、二三三〇時に警戒警報が発令されたために、「長門」が戦闘に参加する場合、主計科の佐竹は記録を取らねばならない慣習ゆえに、眠い眼を擦りつつ耐えていた。

「長門」は今、横須賀工廠第六ドックからほど近い岸壁に横付け繋留されている。前年一〇月のシブヤン海海戦の時、「長門」は二発爆弾を食らったが戦闘航行に支障は無かったものの、「武蔵」は結局沈み、栗田艦隊も、その翌日にあと一步でレイテ島にたむろするアメリカ軍上陸船団と何万人もの上陸部隊を手にかげられるところまで来て、謎の反転命令を下し、艦隊は最終的に作戦を完遂することが出来なかった。後にシブヤン海海戦を含む諸々の戦いの総称としてレイテ沖海戦と呼ばれることになる日米最終決戦は、日本側が戦力を磨り潰し事実上の聯合艦隊壊滅の憂き目を見たのに対し、アメリカ側は大した損害を受けず、レイテ島を含むフィリピンの占領を押し進め、日本側の完敗で終わった。

フィリピンが敵手に堕ちた今、もう日本に成す術はない。南方の資源地帯で取れる重要資源を運ぼうにも、間にあるフィリピンを押しさえられてはとうしようもない。遠からず日本は国内にあるなけなしの資源を使い果たし、餓死する運命にあった。

どうにか日本に帰って来られた「長門」やその他生き残りの軍艦たちは、大半が各地の港でひっそりと息を殺し、引き籠もっていた。動かさうにもその燃料である重油が底を尽きかけているのだ。「長門」はその身に載せていた副砲や機銃を全部陸に下ろし、主砲と高

角砲だけ残して繋留されたまま、動くことが無かった。

艦橋には、レイテ沖海戦を戦った艦長兄部少将に替わって、前年の一月二六日に着任した新艦長渋谷清見大佐ほか、数名が立っていた。

辺りは機器の細かい動作音の他は何も聞こえない。電灯も夜間のため必要最低限しか点けておらず、暗闇寸前である。

眠気と必死に戦っていた佐竹の耳に、「東京方面に火災」という報告が入ってきた。ハッと眼を覚まし艦橋の外へ眼をやる。時刻はいつの間にか日付が変わり〇〇三〇時（零時半）を回っていた。

見れば、北北東の空が赤く染まっている。最初はその色も薄く、染まっている範囲も小さかったのに、五分、一〇分と経つにつれ見る見るうちに毒々しい朱色になり、東京一面の空が昼間になったかのように明るさを孕み始めた。

佐竹は身震いした。寒さのせいではない。恐怖でもない。レイテ沖海戦で実戦を経験した今では敵弾は怖くなくなっている。

あの空の下で今起きていることを想像し、佐竹は言い様の無い絶望感と無念さが五体に染み渡っていくのを感じた。

「君たち、よく見ておけよ」

誰もが燃える東京の空を見つめ、一言も喋らずにいた艦橋内に、静かだがよく通る声が響いた。

艦長の渋谷大佐だった。

「よく見て、決して忘れるな。僕たち軍人が不甲斐無いばかりに犠牲となるのは、罪もない国民なんだ。僕たちが守らねばならぬ国民が……」

煉獄の炎のように空を照らす空襲の火災を射抜くように見つめながら、渋谷大佐は言った。

佐竹はこの時に見た光景と渋谷大佐のその言葉を生涯忘れることが無かった。

* * *

横須賀中央駅を降りた三人は、三崎街道を在日米軍第七艦隊が使用している横須賀基地の方向へ歩いていった。

「それで、お爺ちゃんはどうしたの？」

「結局あの日は、途中で艦長が寝ても良いと言ってくれて、自分のハンモックに帰って潜り込んだのは良かったんだが、中々寝付けなかった」

早苗の手を引いて歩く佐竹の姿は、傍から見れば八〇過ぎの老人には見えぬほどしつかりとしたものだった。

息子の武一は、今日の親父はやけに昔話をするんだなと思った。彼の父は戦中の話は進んで話そうとしない人間だった。以前聞いたところによると、最下層の兵隊として入隊したために、随分と嫌な思いをしたことが多々あり、それが話したがらない理由だということだったが、今日の佐竹は、女の子にしては珍しく戦争だとか、軍艦だとかと言う話に興味を持っている早苗（大部分は祖父の影響である）を相手に、自分が体験したことを分かりやすく言って聞かせていた。

まさか、もうお迎えが近いからだとか、じゃないよな 死期の近付いた人間は昔話をよくするようになるとは割と聞く話であるだけに、そんなことを一瞬考えたのだが、それにしても病気とも無縁の人生だし、一年に一度の人間ドックにも欠かさずかかり、毎年毎年文句の付け所がないと医者に言われるような父であるだけに、可能性としては低かった。

「それから数ヶ月は何にも無い日が続いたんだが……」

佐竹はそんな息子の疑問など知らず、可愛い孫娘を相手に話し続けていた。

* * *

東京の大部分が焦土と化し、レイテ沖海戦を生き残った仲間であり、「武蔵」亡き後唯一の超戦艦となっていた「大和」が、軽巡一隻、駆逐艦八隻という僅かばかりのお供を連れて沖繩へ出撃し、四〇〇機以上の敵機に集中攻撃を受け坊の岬沖で沈み、民間人を巻き込んだ凄惨極まる地上戦の末沖繩が陥落してもなお、「長門」のいる横須賀は七月一八日まで平穏だった。

しかし既に、もはやこの地球上で並ぶものはいないほどに戦力を充実させたアメリカ海軍第三八任務部隊は、七月に入ってから日本本土を赤子の手を捻るよりも楽に蹂躪し始めていた。「長門」乗組員も全員が上陸止めとなり、航空機相手ではほとんど役に立たない四一サンチの主砲と、これも命中すれば儲け物程度の高角砲を武器として戦う準備を整えていた。

一九四五年（昭和二〇年）七月一八日正午少し前、横須賀地区に警戒警報が発令される。

「対空警戒第一配備となせ」

「合戦準備」

スピーカーから艦長大塚幹少将（四月二七日に渋谷大佐と交代）の声流れる。

数十分後に警戒警報は空襲警報へと格上げされた。佐竹は戦闘時にいつも通りつく、艦橋のやや奥まった場所で戦闘記録を取るべく待機する。じりじりとした緊張の時間が過ぎ去る。

もしかしたら、どこか別のところへ行つたんじゃないだろうか……佐竹が頭の片隅で思った一五〇〇時過ぎ、レイテ沖海戦以来聞いていなかった、敵大編隊の爆音が響き渡ってきた。

四一サンチ主砲を連装四基八門、艦の前部と後部に二基ずつ備え、天守閣のようにそびえる艦橋を持つ「長門」の上空を、およそ六〇機の敵編隊が西へ飛んでいく。今の「長門」は艦体を港の一部と同化させるよう偽装が施されており、乗組員たちの多くは去っていく敵機を見て、上から見たら「長門」と港の区別がつかないのではと淡い期待を抱いていた。

「編隊の先頭三機、向かってくる！ 艦首方向、本艦に突っ込みます！」

との見張りの怒鳴り声が聞こえたのはその時だった。大塚少将の「撃ち方始め！」の下令が聞こえ、各砲塔が砲撃を開始しようとした瞬間、佐竹の視界が火の色に染まった。

降下してきた敵機三機のうち、二機の投下した爆弾が艦橋基部の司令塔に命中、炸裂した。爆発したエネルギーはその大部分が上へ向かい、昼戦艦橋を下から襲ったのである。

「艦長」

「副長」

「おおい、誰か」

誰かの声で、佐竹は意識を取り戻した。一瞬気を失っていたのである。

佐竹は身体を起こした。彼のいた場所から前へ数メートル先は滅茶苦茶に壊されていた。辺り一面に肉片と血が飛び散り、壁や天井にへばり付いている。

その天井からは機器類の電線などが垂れ下がり、誰かの片足がそ

こへ引つ掛かってぶら下がっていた。

「誰かおられますか」

佐竹が声を出した。自分では大声を発したつもりなのに、聞こえるのは異様に小さな自分の声。爆音で耳がやられたらしい。

「おう、貴様無事か」

声が出た方を向くと、艦長付きの航海士高島碩夫少尉が、埃塗れの顔をして立っていた。

「はっ、大丈夫であります」

佐竹は今更ながら身体のおちこちを触って確認して言った。うん、どこも痛くない。

「そうか。艦長や副長はみんなやられた」

気を取り戻した時の声はこの少尉のものだった。

彼らが助かったのは、昼戦艦橋内は海図台から後方が一段下がっており、そこを境として居酒屋の暖簾のようなマントレットが下げであつたからである。

気休め程度のマントレットが爆風と破片から彼らを守つたのだ。

「今は俺が本艦の最先任だ。これから指揮を採る」

高島少尉はそう言って生き残つた高声電話をかけた。

佐竹はもう手の施しようがない艦橋前方は無視し、自分たちがいた周りの生存者を捜した。

するとすぐ近くに見慣れた顔の男が倒れていた。

「おい、起きろ、しっかりしろ」

佐竹はその男の身体を揺さぶった。ややあつてその男は目を瞬かせて、ゆっくりと上半身を起こした。

「大丈夫か川田」

佐竹に川田と呼ばれた若い水兵は、頭を振って立ち上がった。

「ああ、なんとか。食らったのか」

「そうらしい。前に出てた艦長たちは全滅だ。貴様上がってたのか」
「伝声管が一基故障してたんで、伝令として来てたんだ」

川田は運が良いのか悪いのか分からないといった顔で答える。佐竹と川田は同じ横須賀一八志（昭和一八年横須賀海兵団志願）の同期生で、その縁で仲が良かった。

一六一〇時ごろ空襲は終わった。この日の空襲で「長門」は合計三発の爆弾を被弾し、三五名の戦死者が出た。艦長の大塚少将の遺体には首が無かった。彼は「長門」の歴代艦長の中でただ一人在任中に戦死した不運な艦長となった。

佐竹も川田も、奇跡的に無傷だった。悪運だけは強いなと二人は笑い合い、遠からず艦長たちの後を追うんだろうなと思ったが、その当ては外れる。

七月二〇日、横須賀の寺で、大塚少将以下三五名の合同慰霊祭が営まれた。佐竹は艦橋で艦長たちの最期を知っているものとして（即死と考えられていたので変な話ではあるが）列席した。

後年、佐竹にとり、不思議と八月一五日の記憶は薄弱である。「長門」の後甲板で整列して、玉音放送を聞いた覚えはあるものの、雑音だらけな上に妙に声の調子が変わる言い方で話すものだから、半分も意味が分からなかったし、それからの数ヶ月間、具体的に何をどうしていたのか、もう思い出すことができなかった。

ただ、終戦から半月後の八月二七日、残務整理を行うため未だ「長門」に留まっていた佐竹は、相模湾をアメリカ海軍の大艦隊が入港してきたところに遭遇し、戦艦、空母、巡洋艦、駆逐艦、大型揚陸艦などの圧倒的な兵力を見せ付けられた衝撃からか、その光景だけは今でもはっきりと記憶している。

彼がはっきりと「負けたんだ」と胸に実感が湧いて来たのは、その時のことであった。

燃料不足のため室内はろくに暖房が効いておらず、外の一月の寒さと大して変わらない現状に、これがかつては世界第三位の海軍の行政を担う組織が置かれた建物だったのかと、改めて今の日本の落ちぶれようを見せ付けられる思いだった。

「こちらがそのリストです」

目の前に座る人物の声に、中部謙吉は意識を現実の世界に引き戻した。

中部が今いるのは第二復員省総務局……一ヶ月前まで「海軍省」と呼ばれていた建物の二階の部屋だった。復員省とは、太平洋戦争の終戦に伴い、日本国外に取り残されている軍人たちを速やかに帰国させるための業務を執り行う省で、海軍省が消滅した後即日その人員と行政を横滑りさせて発足していた。

中部は軍人ではない。大洋漁業（現・マルハニチロホールディングス）の副社長という肩書きを持つ民間人だ。四九歳で日本の捕鯨業界では一、二を争う社のナンバー二を任されてはいるが、その前途は暗い。

終戦後日本に進駐してきた連合軍最高司令部、通称GHQの指令により、日本の漁業は本土近海だけに限定され、戦前から南氷洋で捕鯨を行っていた遠洋漁業会社は大打撃を受ける。さらに、小笠原諸島が日本領土としての主権を停止され、同諸島にあった捕鯨基地が使用できなくなってしまうため、どうにか捕鯨を再開しようと八方手を尽くしてきた大洋漁業は、洋上で捕獲した鯨を処理する捕

鯨母船を入手しなくては、漁に出ることができなくなっていた。

中部が第二復員省へやってきていたのは、その捕鯨母船のための艦船を貸与してもらったためだったのである。

「拝見します」

中部は手渡された書類に眼を通した。

一枚目の紙の一行目に書いてあった艦名を見て、中部は仰天した。そこには、「バトルシップ・ナガト、三万三〇〇〇トン、八万馬力、ダメージ」との文字があつたのである。

「保科さん、いくら母船とは言え『長門』みたいな大艦は必要ありませんよ」

中部は困惑した表情を浮かべて言った。

「承知しています。それを分かった上で、貴社で『長門』を使って頂きたいのです」

テーブルを挟んで中部の真向かいに座る保科善四郎元海軍中将は、きつぱりと言いつつた。海軍切つての知米派であり、太平洋戦争に反対し続けた米内光政元海軍大将の腹心である。

「何故、『長門』のような立派な戦艦を捕鯨母船などに……よくて数千トントクラスの輸送艦か何かで結構と申し上げたはずですが」

中部にしてみれば、捕鯨を行いたいのであって、戦艦が欲しいのではない。第一大きすぎて持て余すことが目に見えていた。しかし保科はそれを分かった上で頼んでいる。理由が知りたかった。

「『長門』が誕生と同時に、姉妹艦の『陸奥』と共に世界のビッグセブンと謳われ、我が国の誇りとして、今は亡き聯合艦隊の象徴として君臨していたのは中部さんもご存知でしょう」

保科の言葉に中部は曖昧な頷きを返す。

「その誇りたる『長門』は、今や帝国海軍戦艦でただ一隻のみ残る存在となりました。すべては我々の不徳の致すところです。これから先、日本がどうなるかは私にも皆目分かりません。このままでは遠からず『長門』は、生き残った他の軍艦たちと共に米国へ連れて行かれ、サンフランシスコあたりで見世物にされた拳句、スクラップにされるでしょう。それは余りにも忍びない」

保科はそこで一旦区切り、冷えてぬるくなった茶を啜った。

「よしんばそれが避けられぬ運命であったとしても、何か『長門』に、最後の奉公をさせてやりたい。我々の不甲斐なさゆえに戦局に寄与できず今日に至った『長門』に死に花を咲かせてやって欲しい。これが貴社に『長門』を使ってもらいたい理由です」

中部は、保科の淡々とした物言いの中に、何が何でも「長門」を持つて行って頂きたいという意志の強さを感じ、余計に解せない気分になった。

「……理由はよく分かりました。ですが事が事ですので、社に帰り部内の意見を聞いてから返事をさせて頂きたいのですが」
「それは全く構いません」

色よい返事を期待していますよ　中部を見る保科の視線からは、そうした声が聞こえてきそうだった。

第二復員省の建物を出て行く中部の姿を二階の部屋の窓から見ていた保科の元へ、彼の部下である山本善雄元海軍少将がやってきた。戦中は海軍省軍務局の第一課長を務めていた典型的な軍政家である。

「どうでしたか？」

「理解はしたが飲むかどうかは半々と言ったところだろう。そりゃあ、いきなり『長門』を持っていってくれと言われて、はいそうですかとは言えんよ」

「全く。ですが、他に当てがない。いや当てがないのは『長門』の行く末そのものでもありますが」

山本は表情に憂いの色を浮かべる。

「正直、僕が言い出したこととはいえ、分の悪すぎる賭けだとは自分でも思うよ」

保科は山本の方へ向き直った。

「ただどね、米内さんが終戦直後に僕に言ったことが、どうにも忘れられないんだ」

終戦時、保科は海軍省軍務局長のポストにいたが、海軍省のトップである海軍大臣は米内光政海軍大將だった。後に「帝国海軍の最期を看取った提督」と言われることになる米内は、一九四四年から海軍省が廃止される一九四五年一月三〇日まで海軍大臣の任にあり、日本を破滅の運命から救い出すべく終戦までの激動の時期を戦い抜いた反動で、既に病に侵されていたものの、彼は部下の保科に対し次の三つを託していた。

一、連合国も永久に日本の軍備を撤廃させることはない。日露戦争前のトン数を目安にして、海軍の再建を考えよ。

二、海軍には優秀な人材が数多く集まり、その伝統を引き継いできた。先輩達がどうやってその伝統を作り上げたかを後世に伝えよ。

三、海軍が持っていた技術を日本復興に役立てる方策を考えよ。このうち二は、後に『宮本武蔵』などの歴史小説の大家で知られる吉川英治に海軍史の執筆を依頼し、吉川も一時期乗り気になっていたそうだが結局書かれず仕舞いとなり、三は海軍が音頭を採らずとも海軍に関わった企業達が日本復興の原動力となっていく。

残る一に関し、保科は、それが一体いつになるか全く予想がつかないことではあるにしても、必ずや海軍を復活させてみせると決心し、山本を含む部下や海軍の穩健派の長老たち他数名と共に、そのための下準備を始めつつあった。

「今度の負け戦で、帝国海軍は完膚なきまで叩きのめされた。何もかも亡くなった。だが、日本は四方を海で囲まれた島国だ。海軍が無くては生きていくことは出来ない。連合国の占領がいつまで続くかは分からないが、そう遠くない未来、我が国が独立を回復する日が来るだろう。その時」

保科はもう一度外を見遣った。空襲で瓦礫の合間にぼつんぼつんと佇むバラック小屋の他にはひどく見晴らしの良くなっている東京の景色が目に入る。

「新しい海軍が必要とされる。それには、精神的な支えが必要だと僕は思う。その役目を果たせるのは、あのフネしかない。帝国海軍の栄光と敗北、光と陰の両方を見てきた戦艦『長門』が……」

「『長門』は象徴になるのですな。新しい海軍において、帝国海軍の過ちを二度と繰り返さず、今度こそ、国民を守るための軍隊とし

て存在するための象徴に……」

山本もまた、保科と同じように、自分達が守れなかったモノが横たわっている景色を見て言った。

保科は中部に対し本心を話さなかった。保科たちは「長門」を生き残らせる可能性を僅かばかりでも掴むために、捕鯨母船として送り出し、その間に少しでも時間を稼ぎ時局が変わることを願っていたのである。「死に花を咲かせたい」というのは、嘘ではないが、出来るならば避けたい未来だった。

勿論、保科も山本も、それが最期の悪足掻きに過ぎない結果に終わるだろうと、頭の片隅の冷静な部分が言っていたのだが。

後日、大洋漁業は「長門」を捕鯨母船として受け容れることに同意した。明らかに第二復員省からと思われる食料その他生活必需品の贈り物、漁船修理の斡旋、大洋漁業が本当に欲しかったスリップウェイ（甲板が海面へ滑り台のように繋がっている構造のこと）付きの一等輸送艦第一九号の貸し出しなどなど、「ホンの気持ちですから」と言わんばかりの接待攻勢に根負けした形だった。

* * *

意外と知られていないことであるが、太平洋戦争において対日戦の事実上のアメリカ海軍最高責任者だった元帥チエスター・W・ニミッツ海軍大將は、日本帝国海軍の東郷平八郎元帥の信奉者である。ニミッツ大將がまだ少尉候補生だった一九〇五年五月、日露戦争最終決戦である日本海海戦において、東郷率いる帝国海軍聯合艦隊はロシアのバルチック艦隊のほとんどを撃沈し、日本側の損害は水雷艇三隻沈没のみに留めるといって海戦史上に燦然と輝く完全勝利を収めた。その戦勝祝賀会が東京湾で開かれることになり、同湾に停泊していたニミッツの乗る「オハイオ」にも招待券が届けられ、彼を

含む六名の候補生たちが東郷の元へやってきた。

東郷は異国の後輩たちの答礼にも丁寧な敬礼を返し、流暢なキングス・イングリッシュでニミッツたちと会話した。話をしたのは一分程度であるし、今となってはどんな会話をしたのかは覚えていないけれど、ニミッツにとって深く感銘を受けた記憶であった。

その記憶により、ニミッツはアメリカ海軍軍人でありながら、つい数ヶ月前まで死闘を繰り広げた日本帝国海軍に対し、悪い感情を抱いていなかった。元々、海軍軍人とは他国の同業者と親しみを感ぜやすい生き物である。陸軍や空軍と違い、フネの上で生活する彼らには共通したしきたりやマナー、ルールが存在する。それゆえ、例え敵国であっても彼らは「同じ船乗り」という一種の仲間意識を持つ。万国の海軍軍人の特徴であると言えた。

そしてもう一つ、ニミッツが今、ワシントンD・C・郊外のバージニア州アーリントン群にその居を構えるアメリカ国防総省庁舎、これより五五年後にアルカイダというテロ組織によりハイジャックされたジェット旅客機が突入する運命にある、ペンタゴンの一角の海軍作戦部長の執務室でペンを走らせているのは、職業軍人としてその存在を許容したくはないある代物の力により、彼が敬愛するトーゴの後継者たちが残した戦艦が葬り去られようとしている運命を変えようとしていたからであった。

ニミッツは、戦争とはあくまで自分達のようなプロによって戦われるべきものと信じる、この時代としては古い考えを持つ軍人であった。彼は、自分が忠節を尽くす偉大なる祖国が生み出した「神の劫火」核兵器なるものにより、戦争が決定的に変質してしまうことへ（軍人としての冷静で合理的な部分は別として）反感を抱いていた。

日本帝国海軍への昔からの親しみ（そこには当然、勝者たるもの敗者を侮辱してはならないという思いも含まれている）と、核兵器などという不愉快な代物への黒い感情が合わさり、そこへ、日本を

占領統治しているGHQから知らされてきた、元帝国海軍戦艦「長門」の民間企業貸し出しの可否についてを米海軍制服組のトップとして判断しなくてはならない仕事が進んで来たとき、ニミッツはある思いつきを閃く。

本来ならばこうした仕事はGHQ内で処理されるものだ。それが海軍作戦部長という職にあるニミッツにまでお鉢が回ってきたのは、その時米国の中で進行していた、あるプロジェクトと関わりがあるからである。

「オペレーション・クロスロード」と名付けられたその海軍艦船に対する核兵器の威力を調査する実験は、日本やドイツといった敗戦国の残存艦艇、米海軍の余剰となった旧式艦などを生贄とし、核兵器を炸裂させ、どのような被害を受けるのか、この先アメリカはどのような軍艦を建造すれば良いかを判断するデータを召集するのが目的だった。

現在、核兵器はアメリカが世界中でただ一国だけ保持している。しかしその絶対的優位がこの先ずっと続くわけではない。第二次世界大戦の途中から対立の度合いを深めつつあったソビエト連邦が、近いうちに必ずや核兵器の開発に成功するだろう。広島や長崎に続く核兵器の実戦使用という将来は、この時のアメリカにとっては限りなく現実性の高い明日なのである。

実験の趣旨は十二分に分かる。海軍の頂点に立つ身として、核兵器が艦隊に向け使用された際の各種データを採っておくことは、この上なく有用だと判断している。

だが、それでも、海を睥睨する美しい軍艦たちが不愉快な存在に消されるとするのはニミッツにとり決して面白い話ではない。

「長門」を捕鯨母船として民間企業に貸し出したとする日本第二復員省の要望をどうするかというGHQからの知らせは、その「長門」もオペレーション・クロスロードに使用されるものとして計画が進行していたから、その兼ね合いをどうするのかという意味だ

った。

墓の下に眠るトーゴー、そして彼の後継者たちにとり、これほど屈辱的な行為はない。第一、トーゴーの一番弟子を自認する自分も認めたくない。

ニミッツは、「長門」の処遇は、日本人自身の手で決めさせるべきだと考えた。

彼は執務室に置かれていたデスクの上にペンを置き、続いて電話を取り上げてダイヤルを回した。

「私だ。そうだ、うん、ここのところ寒さが厳しいね。ハワイの太平洋艦隊司令部が懐かしいよ。大統領閣下はお暇かね？ ふむ、二時からなら時間が取れると。ではその時間にニミッツがお会いしたいと言っていることを伝えてもらいたい。よろしく頼む」

受話器を置いたニミッツは、先ほどまで書き込んでいた書類をタイプライターに清書してもらったために立ち上がった。彼の手にある紙には「『オペレーション・クロスロード』に使用される日本軍艦『ナガト』の処遇について」と書かれていた。

大洋漁業が第二復員省から貸与された元帝国海軍戦艦「長門」が、捕鯨母船としての必要最低限の改造を横須賀の旧海軍工廠で完了させて、マストに大洋の社旗と軍艦旗をはためかせ、日進丸行進曲（大洋漁業が戦前に保有していた大型捕鯨母船を唄った曲）と軍艦行進曲を流しながら捕鯨のための漁場へ出航したのは一九四六年三月一日のことだった。

横須賀の港から出港していく「長門」の姿を、保科元海軍中将与山本元海軍少将は複雑極まりない心境を抱きながら、海軍独特の別れの作法である「帽振れ」　帽子を右手に取り頭の上で振る挨拶をしながら見送っていた。

「聯合艦隊の旗艦をも務めた『長門』が捕鯨とは……」

やがて小さくなっていく「長門」の後姿を見ると、華々しい過去が遠い彼方へ消えていったこの国のあらゆるものの何かを代弁しているかのような気持ちになる。

「言つな、山本君」

山本の呟きに保科がやんわりと嗜めた。

「あの船団が獲ってくる鯨肉は、食料不足の今の我が国にいくらかでも恵みをもたらす」

「ええ、それは分かっているのですが」

山本がため息を一つつきながら言った。

「恐らく、世界史上初めてじゃないですか、戦艦が捕鯨母船になつたなどというのは」

「だろうね。どこまでやれるのかも分からないし、捕鯨が終わったときに事態が好転している可能性は甚だ低いと言わねばならん。それでも、やってみる価値はあると思う」

「日本帝国海軍戦艦『長門』、大洋漁業捕鯨母船『長門』……この次に何と呼ばれるか、ですかな」

「その前に、呼んでもらえる立場になれるか、だよ」

二人の元海軍提督の会話は、三々五々散らばり始めた人々の耳に入ることはなかった。

出港した「長門」は日本各地の他の港から出てきた各船と小笠原諸島母島沖で合流し、捕鯨船団を組んだ。「長門」と、第二復員省から一緒に貸与された一等輸送艦第一九号、文丸、第二関丸という二隻の捕鯨船、木造の鯨肉運搬船新生丸級五隻、処理船の第三五播州丸の、合計一〇隻の小さな船団であった。

春先の小笠原近海はうねりが高く、北東の季節風が強く吹いている。母船は燃料節約のため母島付近で漂泊していたが、流石に三万トンを超える戦艦の「長門」は、高いうねりや季節風にはビクともしない。

「腐っても戦艦というわけか」

佐竹は「長門」の艦橋で記録を付けながら言った。前年七月の空襲で大破した艦橋は、捕鯨母船改装時に最低限の修復が成されている。

佐竹がなぜここにいいのかと言えば、第二復員省から貸し出され

た「長門」の乗組員が、艦を動かすためにセツトで貸し出されたからである。「長門」の定員は一三〇〇名を超えているが、全員が収集されたわけではなく、機関、航海など艦の運行に必要な部署を中心に一五〇名余りが、元艦長杉野修一大佐（前艦長大塚少将戦死後、一九四五年七月二四日付けで着任していた）の指揮の下、捕鯨に当たっていたのだ。

本来ならば必要のない部署である主計の兵長（ポツダム昇進で戦後に階級が一個上がっていた）に過ぎない佐竹が艦に乗り込んでいるのは、四四年の八月に「長門」乗り組みを命ぜられて以来、結局「長門」に乗りっぱなしだったことからくる、単純な艦の愛着ゆえだった。

生まれは東京の八王子で、実家は裕福な商家をやっている佐竹にとり、終戦後にとりあえず肉親の顔は見れたし、これからの身の振り方を考えるまでの、せめて好きなことをやっていきたいとする思いが、「長門」乗組員収集の話聞きつけた際、自然とこれに応じさせていた。第二復員省の方も、ただでさえ混乱の続く日本国内において、バラバラになった元乗組員を集めるのは骨の折れる仕事であり、人手は足りているわけではなかったため、佐竹の申し出を二つ返事で了承した。

そうした次第であるので、佐竹はレイテ沖や空襲のときと同じように艦橋に付き、各種雑務を淡々とこなしていたのである。

「『長門』乗り組みでよかった」

「そう思うよ」

佐竹に同意したのは川田二郎、横須賀空襲の時に危うく死にかけた佐竹の同期生である。艦橋で佐竹と同じく雑務を担当している。

「見てみるよ『一九号』を。あんなかぶられちゃひでえもんだろっ
な」

川田は艦橋の左側の防弾ガラスの先を指差した。その先にあるのは、「長門」と共に貸与された一等輸送艦十九号の、うねりに翻弄されピッチングとローリングを繰り返している姿だった。

「長門」の二〇分の一以下の排水量しか持たない小柄な船体では、この高波ではいいように弄ばれるだけで、あんな状況になっているフネには絶対に乗りたくない、佐竹は思った。

「そつえば、貴様はなんで『長門』に戻ってきたんだ？」

佐竹が思い出したように尋ねた。

「簡単よ。故郷くこがあんまりにもつまらんとところだったから海軍へ入ったんだ。負けて海軍が消えちまって故郷くこへ帰ったのは良いが、俺にやあやっぱりこつちでフネに乗ってる方が性に合ってる」

「伊豆大島だったっけか、貴様の故郷くこは」

「そうだ。火山以外にめぼしいものは何にもないシケた島だ」

利発そうな顔を歪めて川田は言った。徴兵されて陸軍に入って鉄砲担いで死に逝くぐらいなら、まだ死なない可能性が高い海軍へ自ら志願した方が良いんじゃないかという父の言葉に従い海軍へ入った佐竹にしてみれば、川田の話は、人の人生は色々なんだなという陳腐そのものな感想しか思い浮かばなかった。

大方の予想を裏切って、捕鯨母船「長門」の働きぶりは上々だった。同じ捕鯨母船となった一九号が、一五〇〇トン程度の排水量のためしばしば波に煽られ鯨の解体処理に著しい不都合をきたしたのに対し、「長門」は元が戦艦であるだけに艦上での作業がすこぶるやり易かった。困ったことと言えば、図体が大きいため小回りが利かず、解体した鯨肉を本土へ運ぶ一〇〇トンにも満たない運搬船に

とつては、「長門」へ接舷するのが命がけだったことぐらいである。捕鯨船団は四月二三日まで捕鯨を続け、燃料不足のため帰還の途についた。挙げた戦果は捕獲頭数一一三頭、油肉その他生産量一〇〇五トンだった。

「長門」はこの後も捕鯨母船として活動を続けることになり、翌年の一九四七年の夏まで働き続け、食糧難に喘ぐ国民の食卓に貴重なたんぱく質を届けた。しかし佐竹は、四六年中に「長門」を退艦した。一人息子である彼に、そういつまでも自分の好きなことをやっていられる時間はなかった。佐竹には、実家の商売を継ぐという大事な使命があった。

「長門」を去るとき、彼は、戦争で死にたくないから軍人になつたという自分の動機とは別として、この軍艦に深い親しみを覚えていた心境に、今更ながら驚いた。紛れもなく自分の青春の大部分を共にした、帝国海軍の衰亡の象徴に対して。

横須賀の港を後にする彼は、この時、滅亡した海軍の元軍人たちの水面下の工作など知る由もなかった。

* * *

「野村さん、貴方、今の日本人がどれだけ軍隊を嫌っておるのか分かっておられんようですな」

ぴしゃりと言い放つその男の態度は、見る者がみんな「ふてぶてしい」と思わずにはいられない尊大なものだった。栄養失調で痩せている国民が多い中、ふくよかな体型を維持し、ハバナ産の葉巻を美味そうに飲む姿は、首相というよりどこかの悪辣会社の社長と言ったほうが適切である。

「『長門』を残しておきたい？　くず鉄にして資材に回したほうが

なんぼか役に立ちますよ」

そう言うが紫煙を口からオーバーに吐き出した日本国第四八代内閣総理大臣吉田茂に対し、野村吉三郎元海軍大將はあくまで譲らなかつた。

「総理、今の国民が軍隊に対し憎悪に近い感情を抱いているのは先刻承知です」

野村は内心（貴方自身も……）と付け加えた。対米戦反対の立場から戦中は和平工作に従事していた吉田は、一時は陸軍憲兵隊に逮捕され、煮え湯を飲まされている。彼自身、軍隊に対しアレルギー的感情を抱いていたのだ。

「ですが、好むと好まざるとに限らず、一国が生きていく上で丸裸で過ごしてられる道理はありません。日本が独立を回復次第、国を守る国軍は欠くべからざるものです。『長門』はそのために生かしておくべきなのです」

「趣旨は理解しとりますよ。ただね、私どもの頭と、日本人一般の頭の程度が一緒だったら、そもそもあんな戦争、やっているわけがない」

国会で同じことを喋ったら内閣が吹っ飛ぶような台詞だった。しかし野村も、自然とそれに同調する。

「何も今すぐ軍隊を作れとか、そういうことを申しておるのではない。要は、その日本人一般の頭が諸外国のそれと同じくらい冷やされたとき、改めて『長門』の処遇を決めてもらおうじゃないか、そういうことなんです」

野村はこの時七〇歳。かつて、太平洋戦争開戦だけは避けるべく、駐米日本大使としてアメリカ力で交渉にあたった経験を持つこの元・老提督もまた、かつて第二復員省で海軍の再生を密かに考えていた保科や山本と気脈を通じており、捕鯨母船に身をやつし、去年からは特別保管艦として横須賀で放置されている「長門」の行く末を案じていたのである。

彼がこうして、神奈川県大磯町にある吉田の私邸を極秘に訪問しているのもそれが理由であった。

「具体的にどうやるおつもりなんです」

吸い尽くした葉巻を灰皿に押し付け、新しい葉巻を取り出して吸い始めた吉田が訊いた。

「ノープランで私んどこへ来たわけでもないでしょう」

食えん人だと内心呆れながら、野村は、今年（一九四八年）の五月一日に発足した海上保安庁へ「長門」を移管させるのはどうかと言った。

今度は吉田が呆れる番だった。

「海保は純然たる海上警察機構です。海賊を取り締まるのに戦艦を使えと？」

「あくまで籍だけ置いておくのです。実際は使ってもらわないで結構ですし、実際問題使えんでしょう」

「海保には制限がある。総トン五万トンを超えてはならんし、船艇は一五〇〇トン以下だ。『長門』が収まる道理がない」
「ですから、船艇でなければ良いのです」

野村の言葉に、吉田が怪訝な顔をした。

「どういう意味ですか」

「横須賀の港に繋留し、適当な補修工事で陸地と繋げてしまうのです。海上にある建造物であって船舶ではない、こういうわけです」

一瞬、吉田は目を丸くした。ついで彼は、今日この場において初めて笑ってみせた。

「サイレント・ネイビーの矜持はどこへいったのやら。野村さん、貴方がた海軍が開戦前にこうやって陸軍のバカたれ共に噛み付いてくださって欲しかった」

「その反省の元に、こうして総理を伺ったのです」

「いや、よく承知しました」

吉田は早くも消えつつある葉巻を灰皿に置いた。

「私も貴方も、立場こそ違えど戦争中は和平のために駆け回った仲間だ。平和には適切な武力があつてこそです。滅んでしまった海軍の何たるかを継ぐ者がいるべきなのは同感です」

三本目の葉巻をくわえ、豪快に飲む吉田は言った。

「よろしい、私の飲み仲間マッカーサーに話してみましよう」

終戦から三年が経つた一九四八（昭和二十三年）年一〇月、第二次吉田内閣発足から二週間ほどの時を置いた、ある秋晴れの日の密談であつた。

* * *

商家の家に生まれ、子供の頃から将来は実家の江戸時代末期から続く呉服屋を継ぐ事を当然と考えていた佐竹の人生設計は、徴兵で陸軍にとられて死ぬよりはと父が考えた結果、海軍へ志願したことによりだいぶ遠回りをした格好だったが（ついでに言えば、太平洋戦争中佐竹の年齢まで徴兵下限が下げられることはついになかった）、一九四八年に東京商科大学（翌年に一橋大学へと改名）へ入学、実家を継ぐべく商売の勉強を始める。

元々彼は学業優秀であった。旧制小学校五年修了時に六年生へ上がることなく中学一年へ飛び級し、さらに中学四年修了時には五年生になることなく高校一年へ再び飛び級を果たしている。

おかげで彼は高校を卒業していない（一六歳・高二のときに海軍へ志願）が大学入学の資格は持っていた。当時の法律上では高等学校一年を修了している者は大学入学の資格があったのである。

高校以来五年ぶりの娑婆の学校である。この時佐竹は一九二七年生まれの二一歳。周りの同級生と三歳ほど年齢が違う上に、彼ら同級生たちは戦争を兵隊として経験していないぎりぎりの世代だった。自然、レイテ沖で弾雨を潜り、横須賀空襲で急死に一生を得た経験を持つ佐竹は、一目も二目も置かれる存在で、大学内ではちよつと名の知れた人物となる。

佐竹はと言うと、軍隊の最下層たる兵隊として随分しごかれた反動で、大学生活がひどく生ぬるく感じて仕方なかった。

ある種贅沢とも言える悩みだったが、それ以外に不平不満があるわけでもなく、国中が貧乏だったが平和になったことへ素直に喜びながら勉学に励み、一九五二年に無事に卒業する。

そのまま何の問題もなしに実家へ戻って家業の手伝い兼勉強を始めてから一年ほどが過ぎたある日、「海上警備官（幹部）募集」の案内の広告が新聞に載っているのを佐竹は見つけた。はて、海上警備隊とはなんぞや、と佐竹は何故か気になった。

とりあえず問い合わせてみたところ、「海上保安庁の外局として誕

生ずる海上警備隊の幹部を募集する」のだと説明された。

海上警備隊とはなんだ、何をやる組織なのかと尋ねると、どうやら、かつての海軍に似たような組織として生まれるらしい。

海軍に似たような組織……佐竹の心中に何かが去来した瞬間だった。

気付いたときには、入学試験の案内要項を取り寄せ、受験の申請をしまっていた。

一九五三年六月に全国の保安本部（海上保安庁の組織）と保安部で行われた公募幹部採用試験に、佐竹の姿があった。

筆記試験、口述試験、身体検査などの各試験を二日の日程で終え、合格通知を受け取ったのは二週間後だった。

この時点で初めて佐竹は家族に「海上警備官として働きたい」と自分の意志を伝えた。息子は家業を継ぐのだとする、当たり前だとかいふ感情以前の決定事項を何の疑いもなく信じていた父は呆気に取られ、次の瞬間烈火のごとく怒りだした。何のために大学にまでいかせたのだという父の言い分はもつともであった。

しかし佐竹は翻意しなかった。最後には取っ組み合い寸前の大喧嘩にまで発展し、あらかじめ用意していた身の回りの品々をまとめた鞆を引っ掴み、家を飛び出した。

以来、喧嘩別れとなった佐竹は、父が危篤となり病院に運ばれる十数年後まで顔を合わさなかった。

* * *

左手に在日米軍第七艦隊横須賀基地の施設を見ながら、佐竹と早苗、武一の三人は歩く。

かつて広島の呉と並んで日本帝国海軍の本拠地として、幾多の艦を抱えていた横須賀は、かつての宿敵が主として使用し、帝国海軍の末裔である海上自衛隊は、どこことなく隅に追いやられている感があった。

神奈川歯科大学の前を過ぎると、前方に古めかしい軍艦の姿が目に入ってくる。

記念艦「三笠」 一九〇五年の日露戦争最終決戦、日本海海戦において、東郷平八郎率いる聯合艦隊の旗艦として戦い、戦史に名高い完全勝利の美酒を味わった戦艦。彼女はその栄光に彩られた艦生を後世に伝えるために、記念艦として横須賀で余生を過ごしている。

佐竹は常々思っていた。あの「三笠」の傍にある東郷元帥の銅像は、自分たちの後輩が、帝国海軍としての組織防衛にかまけて祖国防衛を忘れ、猛々しく戦い、そして守るべき祖国を道連れにして滅び、宿敵に牙城を明け渡してしまったすべてを見つめていたはずだ。墓の下に眠る東郷元帥は、一体何を思っているのだろうか、と。

「お爺ちゃんは、どうして自衛隊に入ったの？」

手を引いて歩く早苗が、祖父の顔を見上げながら訊いた。

「海上自衛隊、当時はまだ海上警備隊という名前だったが、まあ、その時は、海が好きになつていったんだと自分で考えていた。水兵として海軍に入り、随分と嫌な思いもしたけれど、それでも海の上で生きるのが自分の生き方だと信じた」

「ただ、と佐竹はそこで一息をつき、被っていた海上自衛隊時代愛用の帽子を脱ぎ、白い頭髪を整え被りなおした。

「今では少し違ふと思つている。海も勿論好きだが、お爺ちゃんが自衛隊に入り、士官の道を歩んでいったのは、あの日を「なが」と共に戦つたためだったんだと」

「軍人は政治に関わってはならない」。少しでも軍隊というものを理解している人ならば、首肯しないわけがないこの近代国家の国軍における鉄則を、大日本帝国陸海軍はついに理解できなかった。

ある意味で、帝国陸海軍が滅んだのは、そんな「バカでも分かることすら分かつとしなかった知的怠慢にその原因を求めることが出来よう。

では、陸海軍に替わって日本という弧状列島を防衛する任に当たる陸海空自衛隊はどうか。

結論から言えば彼らは利口だった。自分たちの先輩の無様な姿を過剰なまでに反面教師として見つめ、苦いどころでは済まない敗北の記憶を原体験として誕生した過去を持つ彼らは、政治には一切関わろうとしなかった。

それが、自分たちの先輩の所業のため今以て日陰者の道を歩まされる彼ら自衛隊が存在を許される唯一の態度だったのである。

「しかし、政治に関わらずというのと、政治に俺たちの使い方を選べるための仕組みを作らせることを主張するのは、同次元ではない」

佐竹はそう考えていた。同時に、今のこの国においては、例え同次元ではなくてもこの種の主張を押し通そうとすれば、制服を脱がねばならないのも理解していた。佐竹が手に取り読んでいた新聞の一面にある「栗栖弘臣統幕議長解任される」の記事を読んだ所感は、以上のようなものだった。

一九七八年（昭和五三年）七月、自衛隊制服組の最高責任者であ

る統合幕僚会議議長栗栖弘臣陸将は、週刊ポスト誌上において「現在の自衛隊法は穴があり、奇襲侵略を受けた場合首相の防衛出動命令が下されるまで、自衛隊は動くことができない。敵の侵略を受けている地域の指揮官は『超法規的行動』に出ることはあり得る」という趣旨の文を載せたのが、そもそも始まりだった。

この発言の意味は、国は速やかに有事関連法案の整備を行え、という要望であり、決して自衛官の暴走を示唆したものではなかった。しかし、世界的に普及する意味合いとは根本的に中身が違う日本国内の左翼勢力は、自ら進んで栗栖の発言を「自衛隊の暴走の暗示」と解釈し、「戦前の軍部の悪夢」の再来だと断じ、「軍靴の音が聞こえる」と糾弾、「自衛隊は侵略戦争を行おうとしている」と集中砲火を浴びせ、政治問題となった。

栗栖は政権与党の自民党から影に日なたに主張の撤回を迫られたが、彼は自説を固持した。記者会見の場でも堂々と主張を繰り返した。それが祟って、栗栖はシビリアン・コントロール（文民統制）の観点から統幕議長の職を事実上解任された。

そのニュースが載っている新聞を、佐竹はテーブルの上に放り投げた。

彼は自室　艦長室を出た。向かう先は、昼戦艦橋である。

海上保安庁に籍だけ移管された「長門」は、野村元大将の言うとおり岸壁と一体化され、名前も「ながと」に変更され海上構造物として保管（という名の放置に変わりはない）された。

だが、「ながと」は決して朽ち果てるだけの置物になったわけではなかった。海上保安庁には海を忘れられない旧帝国海軍の軍人たちが多数所属しており、彼ら元軍人たちが、動かす事は出来ないにしても「ながと」を生き永らえさせようと密かに整備を続けていたのである。

それとは別に、かつて新海軍の創設を米内光政元海軍大将に頼まれた保科や山本、彼らの部下だった吉田英三元海軍大佐などを中核

とする元海軍軍人のメンバーが、水面下での新海軍創設工作を本格化させていた。折りしも一九五〇年に勃発した朝鮮戦争により、GHQの対日政策が一八〇度変更され、再軍備を容認する方向に向かっていたのが背景にあった。

「Y委員会」と称される新海軍組織発足の準備委員会が極秘に作られ、山本や吉田が中核となり海上警備隊の創設を主導していく。

この一連の動きを記すだけで一冊の本が出来上がるので詳細は割愛するものの、紆余曲折を経て一九五二年（昭和二十七年）四月二十六日に海上警備隊が創設され、即日海保から「ながと」が移管される。岸壁と一体化されていた「ながと」は再工事の末再びフネとなった。海上警備隊は警備隊と名を変えた後、一九五四年（昭和二十九年）七月一日、海上自衛隊となつて現在に至ることになる。

戦艦「長門」、捕鯨母船「長門」に続き、護衛艦「ながと」として彼女は生きていくことになった。

佐竹が護衛艦「ながと」の、帝国海軍時代から数えて六三代目の艦長に就任したのは一九七八年の三月のことだった。海上警備隊入隊から数えて二六年。かつての主計科水兵は一等海佐にまで出世したのである。

「ながと」はこの時、建造から五八年が経過する老嬢であった。普通ならとうの昔に退役して解体されている。「ながと」が未だ現役に留まっているのは、一つはその海自護衛艦の中では飛び抜けて大きい巨体を活かし、各種新兵器のテストベッドを務めていること（少ない予算の中から金を振り向け、主砲の半自動装填化の改装なども行っている）と、すでに帝国海軍の生き字引が確実に減り続けている海自において、「ながと」を歴史的遺産として保存できないかという要望が自然発生的に持ち上がったことの二つが理由であった。

しかし、自衛隊を取り巻く国内の視線は厳しかった。ちょうど七〇年代は左翼勢力の全盛期であり、共産主義にかぶれているだけな

らまだしも、それとセットになつてアメリカの帝国主義打倒、アメリカに追従する日本政府打倒、戦争を起こす軍隊の解散、かつての軍部の再来であるとする自衛隊の撤廃を臆面もなく主張する人々が、元氣一杯に働いている時代だった。

彼らは、自身の心の拠り所であるソビエト連邦があと一〇年ほどで崩壊し、彼らの抱く世界的に見て奇妙奇天烈としか形容できない歪んだ左翼思想の敗北を突きつけられる運命にあるのだが、この時点ではそうした次第であり、帝国海軍唯一の生き残りである「なが」との保存など知つたら、廃艦に追い込むこと必至であろうと考えられていた。

かくして「ながと」は未だ現役で活動していた。すでに艦内のあちこちに老朽化による不具合が出ていたが、ここまで生きてきた彼女をみすみすく鉄にしたいくはない海自としては、現役に留めておくほか手段がなかった。

「我々は国を守るために自衛官となっています。そりゃ本音では食いつつ、スリルを求めてこの職についている者として、いけるでしょ。うが、宣誓をしている以上、ひとたび有事があれば命を賭けて任務に当たるのが我々の存在理由です」

横須賀の海自基地の護衛艦停泊エリアに碇を下ろし、静かに佇んでいる「ながと」の艦橋で、佐竹は部下の航海長と話していた。

「ですが今の日本は、我々に命を賭けさせる場を間違えている。我々が死をも覚悟して戦う前に、無抵抗のまま全滅するのは武人の了とすることではありません。それを、栗栖さんは言っていたのに……」

「航海長、僕も全く同意見だよ」

佐竹は憤慨している航海長を宥めるように言った。

「後顧の憂いなく全力で任務に邁進できる環境を整えて欲しい……日本以外のどこの国の軍隊でも当たり前前に整備されていることが、我々自衛隊には欠けている。そしてそれを僕らが口にすることは政治的に許されない」

「ながと」の艦橋から見る横須賀の街並みは、あの戦争の爪痕が一切消えてなくなっていた。日本中がそうであった。終戦から三〇年が経った日本は、世界が羨む経済大国へと大きく羽ばたいている。だが、日本人は豊かになる過程で、「国を守ること」を考えなくなった。別に左翼勢力の専売特許ではなく、平均的な日本人の程度として、考えずとも特に困りはしなかったし、軍事だとか戦争だとかを考えるのは、かつての負け戦の記憶を呼び起こす不快なものだと思っていた。

自衛隊は、そうした考えを持つ国民を守るために存在する。なんという矛盾であろうか。

佐竹はこの「超法規的発言」の一件以来考えていた。もし自分が「超法規的行動」を取るか、取らずに致命的な損害を甘受するかの選択を迫られた時、どちらを選べばいいのだろうか、と。

東京の南一一二キロメートルの沖合いにある伊豆大島は、伊豆諸島の中では最大の島であり、島の面積は九〇平方キロメートル、人口はおよそ一万人の、名前通り大きな島である。

大島は四つの港を中心にした地区に分かれている。島の西側にある元町港を中心とした地区、そこから車で一〇分程度の距離にある島の北の岡田港を中心とする地区、島の南にある波浮港はぶきを中心とする地区、そして岡田港からやや東に位置する泉津港の地区である。

今も昔も伊豆大島の産業は観光に頼っている。その目玉は島の真ん中にある三原山。ただの山ならその価値はゼロに近い。この島の産業を支えている三原山は、活火山であった。

伊豆大島の住民は三原山のことを「御神火」と呼び、島に富をもたらす神の恵みとして敬っていた。噴火の度に観光客が大挙して押し寄せ、島に金を落としていく。

その「御神火」が島民に牙を剥いたのは、一九八六年（昭和六一）年十一月二一日のことだった。

噴火自体は、その六日前から起こっていた。この当時の伊豆大島は、三原山の噴火が一二年前に起きたきり休止しており、観光客の数が減少の一途を辿る危機的状況であった。

そのため、島民の多くは久々の噴火を心より喜んだ。全国から噴火見たさに観光客が殺到したのである。

二〇日になって、それまでの噴火が沈静化し、火口から噴出していた溶岩流が動きを止めた。各町では地元警察と話し合い、観光客をもっと噴火口にまで案内できないかと検討していた。

その会議が終わった二一日午後四時一五分。突然、耳を劈く大音響と、今までの噴火に伴う有感地震が兎戯に思える凄まじい揺れが島を襲った。

大噴火の始まりだった。

一四二一年の応永の噴火から数えて五六五年ぶりのことであり、まずいことに噴火は頂上の火口だけでなく、その外側にあつて今まで噴出した溶岩を塞ぎ止めていた外輪山の外側でも噴火が始まったのである。

そして、最初の大噴火から二時間が経過しようとしていた午後六時八分。溶岩流は外輪山のさらに外側に位置する最後の防護壁だったカルデラを越えて、麓の元町市街に流れ始めた。

伊豆大島には大昔の噴火の跡が四〇以上もあった。これら旧火口が一斉に蘇ったら、もはや島の中で避難場所を探している余裕がない。島民一万人が追い詰められた。

伊豆大島元町にある町役場へ設置された対策本部内で、助役の秋田壽と、彼と子供の頃からの顔馴染みである川田二郎はある決断を下そうとしていた。

「秋田、もう四の五を言ってる暇はない。まごまごしていたらこの島一万の人々が溶岩流に飲まれるか冬の海へ飛び込むかしかなくなる。やろう、全島民を脱出させるんだ」

川田の声に秋田は頷いた。

「うん、やろう。川田、俺は町長にこのことを伝える。おそらく大変な事態になるだろう。俺は町長の補佐としてここに缶詰になる。」

川田、お前は「

「分かつてる。現場は任せろ。なに、これでも昔は海軍で兵隊やってたんだ。修羅場はお手のモンだよ」

川田はそう言ってニヤリと笑みを浮かべた。秋田は植村秀正町長に全島民脱出の決断を迫った。顔面蒼白になっていた町長はしかし、秋田の言に即断した。

「やろう。やらんで一人でも犠牲者が出たら大変なことだが、やってなんの被害もなかったらこれに越したことはない。やろう」

かくして、史上最大の脱出作戦が幕を開けたのである。

マニュアルはどこにもない。各人が自分の持ち場で手を尽くすしかなかった。島と本土を往復する東海汽船のフネ、海上自衛隊や海上保安庁の護衛艦、巡視船の派遣要請、はたまた近隣の島々からの漁船まで、大小三〇隻のフネが一人もの人々を脱出させるために呼び集められた。

二二日の夕刻から夜半にかけて、当時の日本政府もまた、伊豆大島噴火の情報を受けて、対策を採ろうとしていた。総理官邸の執務室では、官房長官後藤田正晴が、イラついた表情を隠さず声を荒げていた。

「一体国土庁はなんの会議をやっとるんだ！ この非常時に暢気に何時間も……なんの議題を話しているのか、すぐ聞け！」

カミソリ後藤田とあだ名のつく警察官僚上がりのこの政治家は、いつまで経っても結論の出ない会議というものが大嫌いだっただ。

このままじゃ埒があかないと見た後藤田は、

「安保室長（内閣安全保障室長）佐々君、君がやれ。内閣でやっていこう。協定もへったくれもあるか」

後藤田にそう指示された内閣安全保障室長の佐々淳行は、執務室のデスクにデンと腰を据えている人物へすぐさま視線を向けた。

その人物 第七三代内閣総理大臣中曾根康弘は、構えた表情を崩さず、

「俺が責任を負う、すぐにやりなさい」

と言った。

あさま山荘事件で中央から派遣されて指揮をとった経験を持つ佐々は「そらきた」とばかりに、

「総理の命令でございますね？」

と念を押す。

こうして、日本政府の方でも担当省庁の愚鈍さを切り捨てて、伊豆大島住民の脱出作戦を進行していく態勢が出来上がった。

「今、具体的に何隻のフネが向かっている？」

後藤田の問いに佐々があらかじめメモしておいた内容を読み上げる。

「合計三八隻のフネが伊豆大島へ向かい、先行したフネはすでに避難民を収容し始めている模様です。また、付近を航行していた海上自衛隊の練習艦隊『ながと』と『かとり』が、自発的に訓練を切り上げて北上中とのことです」

その言葉に、中曽根はぴくりと眉を動かした。

「総理？」

「いや、なんでもない。続けたまえ」

「はっ、次に、大島との連絡ですが……」

あの「ながと」が 四二年前、主計大尉として乗り込んだあの「長門」が偶然にも、この事態に立ち向かうべく伊豆大島へ急行している。

そしてその「ながと」には、四二年前に自分の部下だった男が、司令官として乗っているのを中曽根は知っていた。

* * *

護衛艦から練習艦へと格下げされていた「ながと」は、僚艦の「かとり」と共に小笠原諸島の北方で若き士官たちの訓練を行い、所定の任務を終えて横須賀へ帰還する途上にあつた。

「司令、伊豆大島からの無線を傍受しました。島の三原山が噴火し、全島民を島外に脱出させている模様で、付近を航行中の全船舶に対し、救援を要請しています」

「ながと」艦長の報告に、佐竹は僅かばかりに表情を変えた。

「全島民の避難とは緊急であるな」

佐竹は一九八二年（昭和五七年）に海将補へ昇進していた。海軍の水兵は「提督」と称される地位にまで上り詰めていたのだ。

旧軍時代の海軍兵学校出身ではなく、防衛大学の出身でもない一般大学がりの身としては望み得る最上に近い出世であつた。

彼が練習艦隊司令官を拝命したのは昨年の一二月のことだった。以来佐竹は、将来の海上自衛隊を背負って立つ士官の卵たちに、海のオフィサーとしての基礎を叩き込む艦隊の長として任務に当たっていた。

主計兵として、捕鯨母船の乗組員として、艦長として、そして司令官として四度目の「ながと」乗り組みとなっていたわけである。よくよく彼女とは縁のある海上生活だと言えた。

「防衛庁から災害派遣命令は出ていないな？」

佐竹は艦長に訊く。

「現在のところ、命令は入っておりません」

「了解した。これより本艦隊は自衛隊法第八三条第二項に基づき、伊豆大島へ向かう。艦長、よろしく頼む」

「了解しました」

佐竹の決断は素早かった。彼は、自衛隊法第八三条第二項に定められている「天災地変その他の災害に際し、その事態に照らし特に緊急を要し、前項の要請を待ついとまがないと認められるときは、同項の要請を待たないで、部隊等を派遣することができる」という条文（前項とは都道府県知事その他政令で定める者による防衛大臣又はその指定する者への部隊派遣要請である）に基づき、艦隊を災害派遣のため急行させることを決断したのである。

掻い摘んで言えば、助けてという要請を出す暇もないくらい火急の事態では、部隊を命令を待たずに派遣しても良いとする決まりであり、佐竹はそれに従ったのである。

佐竹は故事を思い出す。この「ながと」が生まれて間もない一九二三年（大正一二年）九月一日、関東大震災が発生し、当時大連沖で演習を行っていた「長門」は、演習を打ち切り途中寄港地で救援

物資を積み込み、最大速力で東京へ急行した過去があるのだ。

「ながと」はたちまち緊迫した空気に包まれた。艦長指示の下、航海長は伊豆大島までの距離を算出し、機関長は「ながと」の機関の調子に異常がないか調べる。

佐竹はその光景に既視感を覚えた。昔、これと同じような空気に触れた覚えがある。どこだ、いつだ。

(そつだ、あの時だ。レイテ沖海戦の時だ)

佐竹は思い出した。爆撃を次々に回避する「長門」の艦橋の中で主計兵として働いていたあの時とそっくりなのだ。

脳裏に蘇るあの日の記憶。それと同時に、佐竹は満足のいく思いだった。少なくとも「ながと」に乗り込む海上自衛隊員は、戦争と同じようにこの事態を戦う気構えが出来ているのだから。

艦長の号令が飛ぶ。

「最大戦速即時待機」

「二五ノット即時全力三〇分待機となせ」

伊豆大島まで七五海里(約一四〇キロメートル)の海域にいた「ながと」は、この距離なら全速を出してもどうにか「ながと」の機関は持つだろうと思われた。艦齢六六年になる「ながと」は、カタログ上では二五ノット(約時速四六キロメートル)を出せるはずだったが、老いは隠せるはずもなく最近では二二ノットを出せれば御の字という状態だった。

また「ながと」は蒸気タービン機関であり、所定の速力へ増速する場合は蒸気圧を高めなくてはならず、即座に速力が上がるわけではないのである。

後をついてくる「かとり」は設計通りの二五ノットの全力発揮が可能であるので、「ながと」は「かとり」に追い越されるはずだっ

た。

ところが、三〇分が経ち「ながと」が機関を目一杯回し始めたというのに、「かとり」と「ながと」の距離は変わらないばかりか、徐々にはあるが逆に引き離し始めていた。

佐竹は「ながと」機関長に、現在何ノットかと訊いた。機関長は自身の驚きを隠さずに「二六ノットを超えています」と答えた。

耳を疑った。自分が艦長時代でもこんなことはなかった。

前例がないわけではない。元々日本の軍艦はカタログ上の性能よりも実測値の方が優秀であることが多く、あのレイテ沖海戦時も、二七ノットの全速で走り回る「大和」や「武蔵」に「長門」は付き従い、遅れを取らなかつた。

しかし今の「ながと」は、満足に二五ノットも出せない老朽艦である。

佐竹は、日本帝国海軍艦艇の唯一の生き残りである「ながと」に、太平洋で沈んでいった幾多の戦友たちがあの世から力を貸しているのではないか……自分たちが果たせなかつた「国民を守る」ための戦いに馳せ参じようとしている彼女に、自分たちの無念を晴らしてくれるよう願っているのではないか……そう思えてならなかつた。波を切り裂き突き進む「ながと」。計算によれば、約三時間後、二二〇〇時（午後一〇時）過ぎに伊豆大島へ到着する予定だつた。

* * *

秋田助役の陣頭指揮の下、伊豆大島の全島民避難はどうにか目処が立っていた。関東一円から急派されたありとあらゆる艦船に島民たちは乗り込み、翌朝までには全員が島を離れられるものと推測されていた。

なんとかなりそうだ　町役場内の対策本部に安堵の空気が漂っていた。

「ヘリコプターからの目視によれば、溶岩流が元町の二〇〇メートルから三〇〇メートルまで接近中。アスファルトの上に到達するとスピードはさらに上がり、海に達すれば水蒸気爆発の恐れあり」

という凶報が飛び込んできたのは、まさにその時だった。

その時点で元町にいる島民は一二〇〇人、とてもではないが溶岩流が町を飲み込むまでに全員がフネに乗ることは不可能だった。

午後九時一三分に秋田は波浮港へ島民を移動させ、そこからフネに乗せる決断を下した。

だが事態はさらに悪化の一途を辿る。波浮港の海面が変色していた。噴火の起きる予兆だった。高温のマグマが海水に触れて大爆発が起きる兆しだったのである。

元町には溶岩流が迫り、波浮には水蒸気爆発の危険。

どうすることもできなかった。脂汗を滲ませる秋田を見て、今まで外で避難民の誘導に当たっていた川田もまた、全身の力が抜けるような無力感に襲われていた。

重苦しい空気に支配された対策本部。その静寂を破るかのように、無線機が電波を拾い音声を流し始めた。

「お……よ……うと……じ……」

誰も取るうとしないので、川田は無線機のチューニングを合わせた。

「こちら、海上自衛隊練習艦隊旗艦護衛艦『ながと』。伊豆大島、応答されたし。繰り返す、こちら、海上自衛隊護衛艦『ながと』、応答されたし」

無線機から流れてくる声は、どこかで聞いたような懐かしさを感じさせるものだった。

川田は無線機に応じた。

「こちら伊豆大島対策本部、護衛艦『ながと』、応答してくれ」
「よし、通信が安定した……本艦は現在伊豆大島まで五分のところまで到達した。どの港へいけばいいか指示をして欲しい」

無線の向こうの声は、川田と同年代の人物らしかった。その様子からは武人らしい落ち着き払った態度が想像できる。

「護衛艦『ながと』、現在、伊豆大島は我々のいる町と隣町を合わせて二六〇〇名が未だ避難未了だ。我々のいる元町には溶岩流が迫り、隣の波浮港周辺は水蒸気爆発の恐れがあつて使用できない。このままでは、島民二六〇〇名が」

川田はその先を言うことが出来ない。一〇畳足らずの狭い対策本部に詰めている六人ほどの男たちがみな、川田の一言一句を聞いている。

無線の声色が変わった。

「溶岩流到達までに全島民の避難は無理なのか？」
「時間的に間に合わない。溶岩流の速度からして、日付が変わる頃には元町を襲っている。今も全力で避難させているが、全員の脱出完了はどんなに早くても明日の明け方だ」

電波の先の声の主が息を飲むのがわかった。

二二〇〇時過ぎに伊豆大島へ到着した「ながと」だったが、島の状況は想像以上に絶望的であった。

このままでは、二六〇〇人もの人々が死ぬ……伊豆大島との通信を行っていた佐竹は、拳を血が滲まんばかりに握り締めた。

「ながと」の艦橋からでも、暗闇にぼんやりと浮かぶ伊豆大島の中央部から麓へかけて、真っ赤な溶岩流が流れ出ているのが確認できた。

彼の脳裏にはある光景が映し出されていた。四一年前、まだこのフネが「長門」という名前だった頃に見た、アメリカ軍の空襲で劫火に包まれる東京の空。真昼のように燃える街。焼き尽くされる人々。

当時の艦長渋谷大佐が言った、

「決して忘れるな。僕たち軍人が不甲斐無いばかりに犠牲となるのは、罪もない国民なんだ。僕たちが守らねばならぬ国民が……」

との言葉。

(また、守れんのか)

佐竹の心に、形容し難い怒りが込み上げてきた。

(帝国海軍は国民を守ることができなかった。その反省の下に生まれた我が自衛隊が、あの日と同じように指を啜えてただ眺めてい

るだけしかできんのか！)

考える、何か策はあるはずだ。ここで諦めたら、自衛隊は文字通りの役立たずに成り果てる。国の税金で飯を食う俺たちの存在意義は、その身を挺して国民を守ることにあるのだ。

瞬間、艦橋の外にある「ながと」の主砲 四一〇ミリ連装砲が、彼の目に留まった。ついで敵戦艦に向けて放たれることなく今日に至り、ミサイル全盛の現代では無用の長物と化している化石のような存在。

佐竹はその時、心に響く声を聞いた気がした。

『私はまだ戦える。私を使って欲しい』

(「ながと」！)

そうだ。「ながと」は戦艦なのだ。海自では並ぶ者のない四一〇ミリの巨砲八門を持つ戦艦なのだ。

今の声はきつと「ながと」の声だ。少なくとも彼はそう信じた。

やってみよう。可能性は僅かだが決してゼロではない。

「艦長」

艦橋内で部下たちとどうすべきかを話し合っていた艦長へ、佐竹は言った。

「主砲を使おう。溶岩流と元町の中間地点にありつたけの主砲弾を撃ち込んで大穴を穿ち、溶岩流をそこへ流して時間を稼ぐのだ」

「し、司令、それは」

「無茶苦茶であるのは分かっている。一か八かの賭けだ。しかし、他に策はなし、時間もなし」

「幸いにも訓練のために実弾は積んでいますが、一歩間違えれば町を吹き飛ばしてしまいます」

「今撃たずしてなんのための自衛隊だ。なんのための『ながと』だ！ 艦長、全責任は私が負う。命令だ。撃ちたまえ。心配はいらん、本艦の砲術の腕前なら大丈夫だ」

命令とあらば是非もない。翻意を促していた艦長は、

「了解しました。主砲、撃ち方用意！」

と命令を下す。

まさか自分たちにお声が掛かるとは思っていなかった砲雷科員たちは、しかし命令一下すぐさま主砲射撃準備に取り掛かり、様々な号令が飛び交う。

「右砲戦」

「目標、三原山の麓」

「艦長、射撃目標の視認不能！」

「探射灯照射！」

「ながと」の煙突の周りに備え付けられている探射灯が、光のビームを三原山の麓へ浴びせる。暗闇の中を太いビームが貫き、麓を眩しく照らす。

佐竹はマイクをとった。無線の周波数を先ほど伊豆大島の対策本部と通信した時のそれと合わせさせ、対策本部を呼び出す。

突如、沖合いから一筋の光芒が伸びたかと思うと、三原山の麓をまさぐるように細かく動き始めた。

一体何事だと訝る対策本部の面々の元へ、再び無線通信が入った。今度も川田が返答した。

「こちら伊豆大島対策本部」

「こちら護衛艦『ながと』。これより本艦は主砲射撃により溶岩流の動きを食い止めるつもりだ。そちらの方で射撃目標を指示してもらいたい」

川田は我が耳を疑った。「ながと」の主砲と言えば四一センチ。確かに地面に命中すればその破壊力で大穴を開けられるが、前代未聞の使用方法である。

「町長、沖合いの自衛隊の護衛艦が、主砲弾を撃ち込んで穴を開け、溶岩流を食い止めるつもりです」

「なんだと!？」

「無茶だ。町中へ誤射したらどうするんだ!」

「危険です。やめさせましょう」

その場に集う男たちは次々に反対した。しかし秋田は違った。

「では他にどうしろと? 溶岩流が勝手に止まってくれるのを待つか? 水蒸気爆発が起きないと期待して波浮港へいくか?」

またも沈黙する対策本部。秋田は川田の方へ向いて尋ねた。

「川田、おまえは昔海軍で「長門」に乗っていたそうだな。おかしな偶然だが、どうなんだ、弾丸が誤って町中へ飛んでくる可能性は?」

「適切な射撃目標の指示と、向こうの腕前如何による。しかし、目標は不動の大地だし、向こうも撃ち易いように態勢を整えるだろう。可能性は低いはずだ」

秋田はわかったとばかりに頷き、町長に言った。

「町長、やってもらいましょう。この上は何だってやってみるべきです。座して死を待つぐらいなら、最後まで足掻くべきです！」

その言葉に、植村町長は大きく息を吸い、そしてゆっくり吐いた。ややあつて町長は、

「よかるう。撃ってもらおうじゃないか。どの道、もう万策尽きた。後は、神様仏様に祈るう」

決断を下した。

川田はすぐに無線に取り付き、

「これより発炎筒をもって射撃目標を指示する。二〇分だけ時間をくれ」

と叫ぶように言った。

言うが早い。川田は携帯用の別の無線機を掴むと対策本部を飛び出し、避難誘導のために揃えてあった発炎筒入りのダンボールを自動車に乗せる。役場にいた若い者たちが手伝う。

積み終えた川田は運転席に飛び乗り、積み込みを手伝った若者を一人乗せて自動車を走らせる。すでに溶岩流の流れているコースは頭に入っている。そのコースと元町市街地の中間地点までは五分足らずだ。

元町から東南東へ一〇〇メートルほどいった場所へ到着し、自動車から降りると、三原山から流れ出ている溶岩流が一〇〇メートル先まで迫っているのが見えた。この距離からでも分かるぐらいの熱気が顔を刺す。ぐずぐずしている暇はない。川田は連れてきた若者と手分けして片っ端から発炎筒に火を点け、辺りに満遍なくばら撒

いて置く。

沖合いにいる巨大な艦影から伸びるビームが、やがて発炎筒の噴き出す煙を捉えた。

「ようし、気付いた！」

川田は自動車に戻ると、運転を若者に任せ、無線機に向けて怒鳴った。

「こちら対策本部、『ながと』へ、目標は見えたか？」

「こちら『ながと』、本艦でも確認した。射撃準備も完了している」

「了解した。こっちはもう大丈夫だ。遠慮なく撃つてくれ！」

「了解」

すべての用意は整った。「ながと」は伊豆大島元町の西南西、距離一〇〇〇メートルという戦艦にとっては超至近距離を速力一五ノットで航行しながら、その命令を待つ。

佐竹は双眼鏡で外の様子を見た。大量の発炎筒が出す煙の束を、「ながと」探射灯がしっかりと捉えている。

佐竹はすうつと息を飲み、下令した。

「射撃開始！」

「撃ち方始め！」

艦長の命令と共に砲雷長の、

「撃てえ！」

の号令が響き、艦橋最上部の射撃指揮所に詰める射手が引き金を引いた。電気信号に変換されたその指示は「ながと」の四基の主砲塔へ瞬時に伝わり、装填されている火薬を規則正しく炸裂させた。

時間にしてゼロコンマ数秒以下のタイムラグを置いて、「ながと」はレイテ沖海戦以来実に四二年ぶりとなる実戦で主砲を撃ち放った。

「ながと」のいる場所だけ、闇が綺麗に切り取られたかのように明るくなった。ほぼ同時に身体をてっぺんから殴られたかのような轟音が響き渡る。

砲口から飛び出した八発の一式徹甲弾（原設計は一九四一年である）は初速毎秒七九〇メートルの速度を与えられ、発砲から一秒強で目標となる中間地点に命中、優に数十メートルは地中に潜った後に信管を作動させ、爆発した。

着弾した場所は大量の土砂を噴き上げ、月面のクレーターのような穴を穿つ。

「ながと」は三〇秒に一回のペースで一度に八発の主砲弾を撃ち続ける。主砲の装填機構を改良していたおかげで、戦中の半分の時間で射撃ができるのが幸運だった。

元町へ戻る車中、最初の射撃を目撃した川田は思わず、

「長門！」

と叫んでいた。三原山のもたらず恩恵に与るだけのシケたこの島が嫌で海軍に入り、自分の若き時代を象徴する戦艦が、嫌でたまらずに出てきたのに、潰れてしまった海軍のために結局は戻らざるを得ず、今日まで生きてきたこの島に暮らす住民を救うべく戦っている。その光景に彼は叫ばずにはいられなかった。

波浮港に集っていた住民たちが、島内のバスに分乗して元町へ送り出されている。その頭上を、真っ赤に焼けた灼熱の弾丸が飛び抜けていく。

島民たちはみんな、沖合いで火を噴き続ける「ながと」の姿を目に焼き付けていた。

それだけではない。元町に残っている島民たちの誰もがいける対策本部の面々も含め、老嬢の奮闘を見ていた。役場

誰が最初に言い始めたのかは分からない。

気付いたときには、元町に集結した残存島民二〇〇〇人の大部分が、

「頑張れ、『ながと』！」

「『ながと』！」

「俺たちの町を守ってくれ！」

と、老若男女問わず海に浮かぶ彼女へ精一杯の声援を送っていた。

艦橋に立つ佐竹は、射撃を続けるたびにどこか軋む音が聞こえてくるのを認めながら思った。

「ながと」が今日この日まで生き永らえてきたのも、自分が親父と喧嘩してまで海上警備官になったのも、すべてはこの日を「ながと」と一緒に戦うためだった。そういう運命だったのだ、と。

「ながと」艦長時代に考えた、有事における超法規的行動の如何は、結局、いざとなったら考えるまでもなかったなと、ホンの少し苦笑した。

「ながと」は撃つ。六六年の艦生を振り返り、今まで宿敵に主砲を撃つ機会に恵まれなかった彼女。

かつての主人が自分を上手く使ってくれず、横須賀で朽ち果てる寸前まで落ちぶれた過去を振り払うかのように 同じようにこの国のために生まれながら、ついぞ本分を全うすることなく、南洋の海で、沖繩の海で、瀬戸内海や横須賀のめぐらで沈んでいった彼女の戦友たちの何事かの無念を晴らすかのように、「ながと」は撃ち続ける。

一度に合計八一六〇キログラムの鉄量を叩き込まれる三原山は、自身の噴火と、海上に現出した人工の噴火によって大きくその形を変えていく。

「第二〇斉射、撃え！」

砲雷長の号令が聞こえた直後、二〇回目の爆発が一〇〇〇メートル先に起こる。

次の射撃が行われる前に、佐竹は、橙色をした溶岩流が池のように溜まっているのを確認した。

「目標内に溶岩流が滞留しています。成功です！」

見張り員の歓喜の音が届き、艦橋内に驚きと安堵の音が入り混じる。

「射撃止め！」

「撃ち方止め！」

硝煙の臭いが漂う中、先ほどまでの幻想的でしたらあった主砲射撃が止まり、佐竹はマイクを取った。

「こちら護衛艦『ながと』。本艦から見て溶岩流は留まっているように見える。そちらでも確認して欲しい」

「ややあって、佐竹もどこかで聞いたことのあると思っている声で返答があった。」

「こちら伊豆大島対策本部、溶岩流の進行が止まっているのをこちらでも確認した！ 成功だ！」

瞬間、艦橋内の男たちは喜びを爆発させた。

「了解した。引き続き避難を続けて欲しい」

「ありがとう、本当にありがとう」

ここで、無線は切れた。まだ伊豆大島の彼らには、残る島民を完全に退避させるという仕事が残っている。

「総員気を緩めるな。また溶岩流があふれ出る可能性は十分にある。最後の一人がフネに乗り込むまでは決して警戒を怠るな」

「ながと」艦長は艦内放送で乗組員の油断を戒める。

艦長のそんな態度を見て、これが上に立つ人物のあり方なのだと、航海科員として艦橋にいた山中勝則三等海尉は思った。

そんな山中三尉に対し、佐竹は微笑みを浮かべ艦長の方を見ながら話しかける。

「君も艦長になったとき、あのような態度で部下を統率せねばならんよ」

「はっ、肝に銘じておきます」

と、山中は慌てて表情を作り言った。

佐竹はにこりと笑った。

大噴火の始まりから一三時間四〇分が経過した翌二二日午前五時五五分、朝日の曙光を浴びながら最後の避難船が島を離れた。伊豆大島の住民一万人の脱出作戦が完了した瞬間であった。

溶岩流はその数十分後に「ながと」の開けた大穴から再び流出を開始した。島に残った一九名の消防団たちが、消防車を何台も連結させ、海から水を汲み上げて溶岩の先端にかけ続ける作業を行っていた。結果、溶岩の流れは元町から二〇メートルのところまで進行を止めた。

「ながと」はその身に避難民約一二〇人を乗せて横須賀の港へ入ろうとしていた。

日はすでに高く昇り、師走の音が聞こえてくる季節に相応しい冷たさの風が吹き抜けているが、甲板には人の影が消えることはない。伊豆大島を脱出してきた避難民たちが、「ながと」の主砲塔に集い、その鋼鉄の身に手を触れ、口々に感謝の言葉を述べていた。艦橋からその様子を見ていた佐竹は、誰にもなく呟いた。

「負け続けの私たちが……今度は私たちの勝ちだ」

たまたま傍にいた山中三尉が思わず、「えっ？」と聞き返す。

佐竹は甲板上にいる避難民たちを見ながら続ける。

「見たまえ。彼らは無事にここにいる。それが私たちの勝利だ。彼らが無事に生きている限り、私たちの負けはない」

司令の言う私たちが、司令と、「ながと」のことを指していることに気付いた山中三尉は、大きく頷いた。

* * *

空前の島民一万人脱出作戦、それが「ながと」の活躍により奇跡の成功を収めたことがニュースとなって日本全国に伝わると、主要マスコミや進歩的文化人たちは「ながと」の艦砲射撃を非難した。

政府の命令を待つことなく勝手に実弾を用いて、市街地に近い場所へ砲撃を行うというのは許されざるものであるとするその主張に対し、佐竹は一切の弁解をしなかった。

一九八七年に入り、彼は海上自衛隊を依願退職した。佐竹はあの日、「ながと」の射撃を命じた時点でこうなることは予想していたし、その場合には制服を脱ぐことを決めていたのである。

民間人となった佐竹は、かつての上官であり今では自衛隊の最高責任者たる内閣総理大臣の中曽根康弘と私的に面会した際、「君を庇えなくてすまなかった」と謝罪される。

佐竹はそれに対し微笑しながら、「誰かが責任を取らねばならない事態でした。あの場の責任者が私であった以上、辞めるのは当然です」と答えている。

守りたいものがあるから

横須賀には二隻の、かつて軍艦だった元・フネが存在する。

一隻は、先ほども紹介した記念艦「三笠」。日本帝国海軍の栄光と勝利の象徴である。

彼女がそうした輝かしい過去の体現者であるとするならば、もう一隻は、日本帝国海軍の衰亡と敗北の象徴であり、同時に、海上自衛隊の信念の具現者であると言えることができる。

「着いた」

記念艦「三笠」から歩いて一〇分、横須賀新港に接舷した状態で保存されているそのフネ 記念艦

「ながと」へ、佐竹たちは到着した。

それぞれ入場料を払い艦内へ入る三人。早苗は早速、艦内に設置されている帝国海軍の歴史や海上自衛隊の展示品が置かれているコーナーを見て回り、春休みのレポート退治に勤しみ始めた。

佐竹は、そんな孫娘を優しげな目つきで見つめながら、ゆっくりと「ながと」の甲板を歩く。

* * *

佐竹が退官した後、「ながと」も同じ年に保管船へと艦種区分が変更された。平たく言えば、彼女はもう外洋を駆け回ることにはなくなったのである。三原山への砲撃が、彼女にとり最後の御咆嘯にな

ったということになる。

しかし、除籍はされなかった。東西冷戦が終わり、新しい時代へと変わっていく中、横須賀で繋留された「ながと」は、海自隊員の手厚いメンテナンスを受けながら、九年の時を過ごす。

すでに後身に道を譲っていた元総理の中曽根は、かつての部下に報いるためにも、自身の青春のページを飾る戦艦を後世に残すためにも、自身の政治的手腕の総力を用いて、「ながと」を記念艦として永久保存するべく動いていた。彼は第一級の政治的狸であったが、それだけに国内の政治バランスの見極めには長けていた。

「ながと」が九年間もの間宙に浮いた状態となっていたのは、冷戦期は以前から続く国内の空気の問題から、一九九〇年代以降は与党の度重なる交代による不安定な状況のためであった。

一九九六年初頭、政権が自民党に渡り、保守派で知られる橋本龍太郎が第八三代の内閣総理大臣に就任したのを見計らい、中曽根は「ながと」を退役させ、記念艦とすることを主張し、受け容れられた。

同年四月、「ながと」は正式に退役、海上自衛隊から除籍される。一九二〇年（大正九年）一月二五日に竣工して以来、七六年に及ぶ波乱万丈の艦生であった。

翌一九九七年（平成九年）一月二五日、「ながと」の七七回目の誕生日であるこの日、神奈川県横須賀市の横須賀新港において、彼女は記念艦「ながと」としての新たな航海に乗り出した。

記念艦開艦式セレモニーには、横須賀支庁、神奈川県庁の関係者、防衛庁、海上自衛隊の幹部や横須賀地方総監部の幹部職員、旧日本帝国海軍の生き残りの将兵たち、そして一年前に「ながと」により命を救われた伊豆大島の人たちが招待され、大勢の人々の祝福の元にテープがカットされた。

記念艦「ながと」は所轄は防衛庁が管轄しているが、実際の維持保管は財団法人「『ながと』保存会」が国から移管されて行うことに決められた。

この日は平日であったのにも関わらず、記念艦となった「ながと」を一目見ようと全国から集った人たちは優に数千名を数えた。

黒山の人だかりに染まる「ながと」を、招待客のテントから見つめていた佐竹は、伊豆大島からやってきた川田と共に椅子に腰掛けていた。

あの時、島民を救うべく戦った二人であるが、互いの正体に気付いたのはこの場においてだった。

「どこかで聞いたような気がしたんだよ」

川田が皺の刻まれた顔に笑みを浮かべて言う。

佐竹も苦笑しながら答えた。

「いや本当に、俺も懐かしい声だなとは思ったよ。まさか貴様だったとはなあ」

佐竹も川田も、もう二度とフネとして動くことのない「ながと」を見る。

「あの時は、心底ダメだと思った。俺も、島のみんなも死んでしまつと覚悟した。だから、『ながと』が来てくれた時は、『ながと』が艦砲射撃で溶岩流を食い止めてくれた時は、本当に嬉しかった。助かったと思つた」

「自衛官としての務めを果たしただけだ。事実上首にはなつたが、悔いはないし、やらねばずっと後悔していたよ」

佐竹の言葉に川田は遠くを見る目をしながら頷いた。

「戦艦として、捕鯨母船として、護衛艦として……『ながと』ほど数奇な一生を歩んだフネは、世界中を見ても他にはないだろうな」

「川田、『ながと』の一生は終わってないぞ。これからが新しい歩みだ。日本海軍の伝統を知るただ一隻のフネとして、海上自衛隊の象徴として長らく生きた『ながと』の功績を、若い人たちに伝えていく仕事がある」

川田は、そうだったな、全く、休まる暇もないな、「ながと」は、
と言い、笑った。

ぼろぼろの姿で横須賀に留め置かれ、捕鯨母船として鯨を解体し、護衛艦として海上自衛隊の象徴として君臨して、伊豆大島で大自然を相手に戦った彼女の巡りゆく景色が今、佐竹の中で流れていく。
手繰り寄せた世界の先に、「ながと」は記念艦として永久保存される幸福を享受することになった。

万感胸に迫る思いで、佐竹は自分の海上生活の多くを共にした彼女を、いつまでも見つめていた。

* * *

あの開艦式から一四年が経った。

今、佐竹と「ながと」の後輩たちは、東北地方太平洋沖地震という日本史上最大級の災害に立ち向かうべく、全力で救援を行っている。かつての宿敵にして今日の友であるアメリカ軍も、「オペレーション・トモダチ」の下、原子力空母さえ投入した救援活動を開始している。

佐竹は、「ながと」の一番主砲塔をそつと手に触れた。ひんやりとした鋼鉄の冷たさが肌に伝わる。

（見ているか、「ながと」。あの日、俺たちが戦った時と同じように、後輩たちはこの国の人々を救うために戦うんだ）

艦内のフロアを見学してきた早苗が、祖父を見つけて近寄ってきて

た。祖父は、目を瞑り、ただ黙って「ながと」の主砲に手をかざしている。

若い彼女は祖父のその行為の意味をはっきりとは分からなかったが、何かを願っているように見え、祖父の傍でじっと待っていた。

「父さん、『ひゅうが』だ」

そこへ、息子の武一が声をかけた。

その言葉に佐竹は目を開け、息子が指を指す海の先を見た。

一隻のフネが、ゆっくりと横須賀港から出ようとしていた。

平べったい全通式甲板、その上に乗るいくつかのヘリコプター、右舷側に寄った艦橋構造物、素人目には空母にしか見えない海上自衛隊最新鋭の護衛艦「ひゅうが」が、出撃態勢を整えて東北沖へ向かおうとしていた。彼女には、伊豆大島救援の際にだけ言葉を交わした士官が艦長として乗っている。それを見計らってここへ来たわけではなかったが、思わぬ偶然に佐竹は感じ入るものがあつた。彼は被っている帽子をとり、右手で持って頭の上で左右に振った。帝国海軍時代からの伝統である「帽振れ」の挨拶である。

護衛艦「ひゅうが」艦長の山中勝則一等海佐は、待ち受ける東北の惨状を想像し、逸る気持ちを抑え冷静に各種命令を下していた。

「ひゅうが」は哨戒ヘリコプターを効率よく運用するために、広い飛行甲板を持ち、「ながと」が退役して以降の海上自衛隊においては最大級の大きさとなる全長一九七メートル、基準排水量一万三九五〇

トンの艦体を活かし、災害派遣の際はその収容能力とヘリコプターによる物資搬送能力が遺憾なく発揮されるものと期待されていた。

三月一日の地震発生時、「ひゅうが」は定期検査のためドック

に入渠していて、ただちに出撃するため乗組員は徹夜で物資搬入や出港準備を行い、こうして翌日には東北沖へ向かうことができた。

「ひゅうが」の高度に機能化された艦橋から、山中は右舷側の横須賀新港にいる「ながと」を見ていた。

本来ならば艦長は艦の中核であるCIC(Combat Information Center 戦闘指揮所)で指揮を取らねばならない決まりである。通常の場合、艦橋に上がるのは航海長なのだ。山中は敢えて艦橋に上がっていた。彼は艦内放送のマイクを取り、

「手空き総員上甲板」

「右舷に整列」

と命じ、手の空いている乗組員全員が上甲板に整列した。

「総員『ながと』に対し、敬礼！」

号令一下、手空き総員、艦橋で手の空いている者、そして山中が、右舷側の先にいる「ながと」に対し、敬礼を捧げる。

山中は、かつて自分に、自衛隊が為すべきことを身をもって教えてくれた偉大な先輩に対し、精一杯の敬意を表すると共に、これから戦わんとする戦場での奮闘を彼女に誓ったのである。

海上自衛隊員で、「ながと」の伊豆大島におけるその伝説的な戦いを知らぬ者はいない。

勿論彼は、その「ながと」に、佐竹が来ていることを知らない。

「お爺ちゃん、あれ見て！」

早苗が声を上げた。佐竹は孫娘の指差す方を見るが、老眼の進む

目では霞んでよく見えない。

佐竹は鞆から双眼鏡を取り出し、「ひゅうが」を見、そして、すべてを理解した。

彼は込み上げる熱いものを止めることができなかった。

「大丈夫だ、東北は、日本は大丈夫だ……！」

声を震わせて言う佐竹に気付き、早苗が心配そうな顔で「泣いてるの、お爺ちゃん？」と訊く。

そんな孫娘の頭を、彼は優しく撫でる。

「心配せんでええよ。大丈夫だから」

武一は父と娘のその姿を見て、父がなぜここに来たがったのかを理解し、自身もまた、「ひゅうが」に向けて手を振る。

佐竹は思った。

（「ながと」、おまえの後輩たちは、ちゃんと受け継いでいたぞ。国家のために、国民のために戦う海上自衛隊の誇りを）

日本帝国海軍が太平洋戦争へ投入した一二隻の戦艦のうち、終戦時にただ一隻だけ生き残っていた「長門」。時代の要請によりその一生の三分の二を「ながと」という名前で過ごした彼女は、歴史の彼方へ消えていった主人と戦友たちの無念を晴らしたのを最後に、数奇な艦生に一つの区切りをつけた。

彼女の子孫たちは、後に自衛隊建隊史上最大の作戦と呼ばれることになる、東日本大震災への戦いへと赴いていった。

彼らはいつだって迷わない。自衛隊の本懐を全うしてみせるといふ消せない想いがあるから。

「ながと」から受け継いだ、確かな絆を信じて。

守りたいものがあるから（後書き）

本作はこれにて終わりです。

正直に申しまして、色々と無茶をやっている内容であるのは承知しております。

本作は史実と比較しまして次の2点を変更しています。

- 1・旧海軍関係者による「長門」の積極的な温存
- 2・史実よりも大規模な伊豆大島三原山の噴火

著者としては、一つの変更点からドミノ倒し式に歴史が変わる架空戦記がすきなのですが、それだと盛り上がりには欠けるために、本作ではこのようにしました。

まあ、佐藤大輔氏のRSBCなどでは関東大震災の規模を変えていますし、これぐらいは大目に見てもらえたらなと思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7493x/>

Old Navy Never Die 戦艦「長門」の戦後史

2011年10月20日02時08分発行